

# 韓国農村地域における住民の学びと発信

—マウル（村）学会の出版書籍に注目して—

吉岡亜希子

**抄録：**本稿は、韓国の農村において持続可能な地域づくりを目指した住民の学び合いの場・公論の場として組織された「マウル（村）学会」の出版書籍に着目し、住民の学びの内実を明らかにすることを目的とする。本研究は持続可能な地域づくりと農村教育共同体づくりが一体的なものであり、それらを可能とする教育実践としての社会教育の役割、学びの内実を明らかにする総合的な研究の一環という位置づけとなっている。本稿では2017年から2021年に刊行された7冊の書籍を対象に整理を試みた。その結果、住民が農村で暮らすこと、農民、農業、教育、土地、文化といった概念そのものを問い返し、住民同士の議論を触発する内容で構成されていることが分かった。

**キーワード：**農村教育共同体、持続可能な地域づくり、地域学会出版書籍、社会教育、韓国

## 1. はじめに

本稿は、韓国の農村において住民らが地域の未来について議論する場・公論の場として組織した「マウル（村）学会」の出版書籍に着目し、住民の学びの内実を明らかにすることを目的とする。持続可能な地域づくりと農村教育共同体づくりが一体的なものであり、それらを可能とする教育実践としての社会教育の役割を明らかにするための総合的な研究の一環という位置づけとなっている。社会教育は社会教育法で規定されている通り、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）を指すものである。本研究においても地域で多様に展開する住民たちの教育実践、学習実践の総体を社会教育実践として捉え、分析することを目指すものである。

筆者は共同研究者と共に2009年から学校教育、社会教育、若者支援を横断的・統合的に捉えた地域ぐるみの教育を積み上げ、活力ある農村を創造している韓国忠清南道洪城郡洪東面の調査を行ってきた。対象地域の教育を基盤とした農村教育共同体の直近10年間の変化については、吉岡ほか(2021)「韓国農村地域における教育共同体の創造—代案学校を核に深化した教育実践の10年間の変化に注目して—」にまとめた。この中で明らかになったことは以下の3点だった。①公立小学校の教育改革が進展していること、②若者の農村定住のための組織が機能していること、③地域住民が地域の未来について議論する場として「マウル（村）学会」が創出されていることであった。本稿では、この3点目にあたる「マウル（村）学会」における学びについて、学会が出版する書籍に焦点を当て、住民がどのような議論を積み重ねているのかを明らかにしていく。今回出版書籍に注目し分析を行った背景として新型コロナウイルスの影響がある。本稿を含めた研究の全体計画では、対象地域において主にインタビュー調査を行い、持続可能な地域づくりと社会教育実践の関連を明らかにすることを目指した。しかし、渡航困難な状況が長く続き、研究計画を見直さざる得なくなった。そこで国内で進められる研究として出版書籍に着目した。

今回対象地域とした洪城郡洪東面の地域づくり、教育実践の先進性と歴史的展開、核となる代案学校の概要、「マウル（村）学会」設立までの経緯は以下の通りである。吉岡ほか（2021）でまとめた論文の該当部分を一部抜粋する形で再掲する。長文の引用となるが、本稿に関わる歴史的経過を確認する上で必要な情報であるため再掲することとした。

韓国忠清南道洪城郡洪東面は、人口約 3,000 人の農村である。小規模の農村ではあるが、韓国国内はもとより日本からも多くの研究者がこの地で発展する教育共同体に関心を寄せている。1958 年にはじまった代案学校「プルム高等農業技術学校（日本の私立高校に相当する alternative school）：以下、プルム学校」の教育を基盤としながら、60 年を超える長い年月をかけて人間らしい暮らしづくりに取り組んでいる。同校は『共に生きる平民』を校訓とし、画一的な教育や競争教育とは異なる志向性をもっている。その教育内容に共感した子どもたちが都市部から数多く入学している。短期の高等教育機関である専攻科は「地域に根付く平民大学」を目標に 2001 年に開校。20～40 代の多様な年齢層が学び、有機農業に関心のある帰農者など都市からの移住者も少なくない。同地は農村教育共同体運動の代表的事例としても知られており、学校教育を出発点に有機農業を根付かせ、協同組合方式によって地域に必要な施設や組織を立ち上げ農村生活の充実を目指してきた。現在、洪東面を含む洪城郡は韓国の有機農業先進地域となっている。

農村教育共同体運動の基盤となったプルム学校は、1958 年私立の高等公民学校として設立。キリスト教系（無教会派）の全寮制小規模私立学校として始まった。理事長のパク・ウァン氏によると、プルム学校の教育には、①人文学的な教養を育てる、②生命・環境に優しい農業教育、③日常生活から学ぶ、④地域と共に行う教育、以上 4 つの大きな流れがあるという。韓国では 1990 年代以降、競争教育的な制度上の学校を乗り越える新しい教育実践を模索した代案教育運動が起こり、制度内外で様々な代案学校（alternative school）が誕生している。代案学校のモデルとなった学校の一つがプルム学校である。

こうした歴史的な蓄積の上で形づくられてきた洪城郡洪東面の農村教育共同体の教育実践を筆者らの共同研究グループも研究対象として長年調査を行ってきた。日韓双方で 10 年を超える実践と研究の交流を積み重ねてきた。実践者と研究者が共に視察や研究会に参加し議論をする中で、本稿で取り上げる住民の公論の場「マウル（村）学会」が誕生した。住民が地域の未来について議論する場として創出された「マウル（村）学会」（2018 年 6 月設立）は協同組合方式で誕生した図書館が拠点となっている。学会の正式名称は、「イルソゴンド」 일소공도 (il so gong do)。韓国語で「働くだけでは牛になり、勉強だけでは鬼になる」を略した言葉である。

設立のきっかけは 2015 年に日本の社会教育研究者がゲストとして招かれ同地で行った講演にある。講演会で地域の持続可能な発展には住民、専門家、機関等が連携し、地域の教育計画を自ら主体的に作り上げていく意義が語られた。その手法として「地域学会」が紹介されたことを契機に「マウル（村）学会」が創設されたのだ。背景としてプルム学校関係者や地域住民が洪東面には多様な人・活動、グループがあるものの連携が十分ではないという問題意識を持っていたことが挙げられる。そのためそれらをつなげるための組織として学会を立ち上げる機運が高まった。2016 年以降教育や地域づくりの専門家の協力のもと学習会を積み重ね、2018 年 6 月に正式に設立となる。以後、毎月、定例の勉強会や宿泊を伴う勉強会が開催されている。学会での学びは、農村社会学、人文学、農村政策など多岐にわたるといふ。また、学会では、インプットだけでなく自らが発信することにも力を入れており、

年に2回定期刊行書籍として『マウル (村)』という名称の本を出版し会員の学び合いと地域への還元を目指している。本稿で分析対象としている書籍がこの『マウル (村)』である。2017年の創刊号から2021年の第7号までを対象に住民をはじめ多様な分野の専門家が寄稿した文章から彼らが何を問い、どのような発信をしているのかを確認していくこととする。

## 2. 研究方法

今回分析対象とする「マウル (村) 学会」の出版書籍『マウル (村)』は7冊である。2017年12月に創刊号が発行され以降、年に2冊のペースでの発行が目指されている定期刊行物である。創刊号から第3号までは2019年9月3～5日に実施した現地での共同調査の際に入手した。第4号から第7号については、新型コロナウイルスの影響で現地調査が行えなかったため郵送により入手した。本稿ではこれまで出版された7冊の書籍の全体像を把握することを目指す。まず、各号の執筆者のタイトルと本文中に記されてる所属を加えた基礎資料を作成した(表1～表7)。その上で、各号のテーマと概要をまとめた。各号のタイトルと執筆者名については韓国語の専門翻訳者のチェックを受けた。本文については翻訳ソフトを用い概要を把握することとした。そのため、書籍の本文についてはあくまでも仮訳であり、本稿では概要を整理し全体像をとらえることに止まるという限界がある。本稿で基礎的資料を整理した上で、各執筆者の学びの内実については現地調査再開後、インタビューを行い精緻化することとしたい。

## 3. 結果

本節では『村 (マウル)』創刊号から7号までのタイトルと執筆者の属性一覧と共に各号のテーマと概要を整理した内容を述べていく。特に各号の冒頭に記述されている編集委員会委員長の巻頭論文から何を目的に編纂しているのかを把握していく。各号の表題は次の通りである。創刊号「農村で勉強する」、第2号「村, 教育, 村教育共同体」、第3号「未来の農のための土地」、第4号「農民と住民って、いったい誰なんだろう」、第5号「マウル (村) 農業を提案する」、第6号「コロナ以降の社会と農村の可能性 自治と支援/補助, その境界の不安」、第7号「21世紀農村マウル (村) 文化の再構成」。本来であれば、どのような議論を経て各号の表題が設定されたのか、出版書籍がどのように活用されているのかを合わせて明らかにすべきだが、新型コロナウイルスの影響で十分に調査を進めることができなかった。そのため本稿では基礎資料として書籍の内容に限定して整理・分析することとした。

### 3.1 創刊号「農村で勉強する」

創刊号の扉のページには『マウル (村)』を創刊することの意義をこう記している。「村は集まって生きようとする心と集まる行為からなされる」「『マウル (村)』は、21世紀の村の生活, 相互扶助と自治と公共の価値を実行する生活を想像している」「『マウル (村)』は、小さな田舎の村で起こる問題がどのように巨大な全体とつながっているのかを、その接続網の中で問題を解いていくためにどんな具体的な努力が必要かを模索する実践と議論を発信する」。

本号ではプルム学校元校長であり、当地の農村教育共同体づくりの精神的支柱として運動を牽引してきたホン・スンミョン氏に対して、学会事務局を担う若者シン・ソヒ氏とザン・ユリ氏がインタビュー

を行っている。テーマは、21世紀の農村で勉強することの意味と方向である。勉強とはいかなるものなのか、勉強の嫌いな人はどうすればよいのか、本の意義、教科書だけではなく生活を通し学ぶということ、プルム学校の特性の一つとして語られる村が学校であること、韓国の依然として厳しい大学入試問題について対話を深める文章が掲載されている。そこには農村の現実に基づいた仕事と勉強を軽重なく捉え取り組むことの意義が語られている。この定期刊行物で大切にしたい基本理念を明示した内容といえるだろう。

創刊号の締めくくりには、「マウル(村)学会創立宣言文」が掲載されている。そこには、地方、農漁村、普通の人々が無視されてきたこと、そして商品であふれる都市部において人々がバラバラにされ、新商品を買うためのお金を稼ぐことに没入する利己的な消費者にされていることを指摘する。さらに温暖化による自然環境の破壊に警鐘を鳴らしている。そして、21世紀に求められる統合と共存の価値を「農」を軸に仕事と勉強を分けずに捉え実践していくことを探求する意思がつつられている。「長い歴史を通して蓄積されて私たちの村の深く貴重な経験と特別な条件を蘇らせ、村で起こる生き活きとした出来事を忠実に記録し、勉強を始める時です。」「村ごとに積み重ねてきた特別な経験と条件を学び、お互いの不足を補完しながら持続可能で普遍的な経験に広げていくときです。」と呼びかける。住民による地域の学会が仕事という営みと勉強（筆者注：ここでは住民同士の学び合いという営みと解釈できるだろう）を統一的に捉える場としての学会、そしてそれらを記録する媒体として『マウル(村)』が創刊されたといえる。

表1 『マウル(村) 創刊号』～タイトル、著者、所属の一覧

(表1～表7は筆者作成、所属は出版当時のもの)

■ 『マウル(村) 創刊号』 テーマ「農村で勉強する」 総ページ数 196	
<b>扉</b>	
「再び村の生活を想像する」	パク・ヨンソン (マウル(村)学会運営委員会, 編集委員会)
<b>芽生え 農村で勉強する</b>	
「対話と学習, 村を創ること」	キム・ジョンソプ (韓国農村経済研究院)
「農と村, 働くことと学習, 村と学校」	チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場, 元プルム学校専攻部教員)
「一忠南 ホンソン郡チャンゴック面 若い協業農場の実験学校を越え村と共に」	ヤン・ピョン・チャン (韓国・公州大学)
<b>響き</b>	
「21世紀のイルソゴンド精神」	ホン・スンミョン (プルム学校元校長, 農村教育共同体運動のリーダー)
	イ・ピョニョン (プルム学校卒業生, 地域新聞創刊を主導, マウル(村)学会運営委員会)
	*イルソゴンド=仕事をすれば牛になり, 勉強ばかりするとトッケピ (お化け) になるの意で用いられている流行語, 俗語.
「真理に基づく愛の実践」	シン・ソヒ, ザン・ユリ (両名ともマウル学会事務局スタッフ)
<b>継承 (つながる)</b>	
村の人々の図書館	
「ホンドンパルマク図書館ができるまで」	イ・ピョニョン (同上)
「アンナムベバウ小さい図書館と住民自治」	ファン・ミンホ (地域新聞編集局, 地域の住民組織の活動等に従事)
「批判と抵抗としての読書」	アン・チャンス (詩人, <책읽는> 社会文化財団)
<b>浸透</b>	
「千個の記憶1—ムナドン保育園」	チョン・エファ (洪城環境農業教育館), 記録: ザン・ユリ, シン・ソヒ (同上)
「抑鬱と共同体」	クム・チャンヨン (全国婦農運動本部と正農会)
「新しい波」	シン・グァンホ (プルム学校卒業生, 営農)
「ホンドン回顧録」	キム・ゴンウ (韓国・大田大学)
「ホンソントン (通), 青年を勉強する」	アン・ヒョンギョン (新聞記者, 期限のある公務員)
「私たちの地域で結婚して子供を持つと他の場所よりお金をもっとあげます」	キム・ミョンシユスク (新聞記者, 地方議員, マウル(村)学会運営委員兼編集委員)

拡大) 広まる, 染みる

「働く老子 一道家の村の構造」

「“正統右翼”の場所の起源”

または完全に説明されていないその用語

—キム・コンウの『大韓民国の設計者達』を読んで」

マウル学会イルソゴンド 創立宣言文

ハム・ソンホ (詩人, 作家)

チャン・ジョンイル (詩人, 作家)

### 3.2 第2号 「村, 教育, 村教育共同体」

第2号では今日我々が認識している学校とは異なり, 村, つまり地域社会そのものが学校の機能をもっていることがテーマとなっている。巻頭論文では「村が学校だという言葉は比喻ではない。その言葉をそのまま理解しなければならない」と強調する。マウル (村) 教育共同体という言葉は地域の教育実践家だけでなく, 地方自治体や教育行政機関でも使われるようになってきているという。しかし, 本号では, 例えば学校の教育課程や運営に保護者が関わり成果を上げている事例に対し, それらは十分なマウル (村) 教育共同体とは言えないと指摘する。学校と村を区別する限り, 中心 (学校) を補完しようと周辺 (村) の資源を引き寄せることを止められないという。教育は学校の中でのみなされるという常識を根本的な部分から壊す必要があるというのだ。また, 地域の子どもと関わることになる様々な職種の住民たちが教育的な次元で自らの人生を語り, 伝える力を持つ必要があること, そしてマウル (村) 教育共同体の実践の目標と方向を共有するネットワークを形成する必要性を指摘している。

次に共同育児運動として取り組んできた地域のカッコル子どもの家 (日本の私立保育所にあたる) の実践から保育者と保護者, 地域住民の協同が語られる。地域社会が子どもたちと一緒に育てることが目指された共同保育運動は, 1990年代に本格化し, 都市部の環境問題や安全な農産物への関心の高まりと合わせ行われきた歴史的経過がまとめられている。農村の持続可能性については, 農民の二極化の問題や誰が農村を守るのか, どのような農業形態をしていくのかといった課題を提示している。

表2 『マウル (村) 第2号』～タイトル, 著者, 所属の一覧

■ 『マウル (村) 第2号』テーマ「村, 教育, 村教育共同体」 総ページ数 216	
扉	
「村, 教育の環境から教育の主体へ」	編集委員会
芽生え   村, 教育, 村教育共同体	
「村が学校って言ったのに?」	キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員) アン・ヒョンギョン (新聞記者を経て, 現在は期限のある公務員) チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元プルム学校専攻部教員)
「村教育共同体ではなく村学校共同体だ」	イム・ギョンス (農村コンサルティング, 社会的起業家)
「村の人々が村のために: チョロクヌリ協同組合が歩んでいく道」	パク・ジンヒ (幸せになるザンス教育ネットワーク, チョロクヌリ協同組合)
継承   村の人々の子育て	
住民たちが建てたカッコル保育園	イ・ピョニョン (プル学校卒業生, プルム生協の設立, 地域新聞創刊を主導, 現在同紙の記者兼論説委員) ザン・ユリ (マウル学会事務局スタッフ)
「人と村を変化させる共同育児」	クク・スンヨン (韓国農村経済研究院農食品政策成果管理センター)
鍛錬>打つ, つける	
「農村の持続可能性, 未来の農民, 挑戦しなければならない課題」	キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員) チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元プルム学校専攻部教員) ファン・スチョル (農政研究センター)

浸透

「千個の記憶 2：ヒョンクアン学院」 イ・ミンヒョン (マウル (村) 学会運営委員, 高校教員)  
 「サンハジュン村の昔の名前」 シン・ソヒ (マウル学会事務局スタッフ)  
 「本当に心が会ってこそ」 シン・グァンホ (プルム学校卒業生, 営農)  
 「親環境農業とともに暮らすこと」 クム・チャンヨン (全国帰農運動本部と正農会)  
 キム・ギョンスク (ローカルフード学校給食支援センター)  
 「コッピヌン学校の若者協業農場体験報告書」 ソン・ヨンミ (コッピヌン学校教員)  
 「森で」 イ・ジュンピョ (フォトスタジオのアシスタント)

拡大

「場所と教育」 チャン・ジョンイル (詩人, 作家)  
 「働く老子 2：“仁”の村で」 ハム・ソンホ (詩人, 作家)  
 「韓国の農民研究, 未来を描いてみよう」 ソン・ウォンギョ (農業農民政策研究所)  
 Jan Douwe van der Ploeg の『農民と農業』を読んで

マウル学会イルソゴンド

創立宣言文  
 共に作る人々  
 活動報告

3.3 第3号 「未来の農のための土地」

第3号では農地が減少傾向にあることに対して様々な側面から問題提起を行っている。開発と都市化の推進により青年たちが安定して農業地を確保できない現状に対し、制度や政策面からの改善を提起する。また若い世代の新しい形の農業参入モデルの提案を行っている。特にプルム学校卒業生と元教員で展開している洪城地域の協同組合若い協業農場の実践を本号から連載という形式で掲載している。若者たちがプルム学校やプルム学校専攻科で学び、卒業後、農業で生計を立てていく道筋や農村で仕事と学びを両立させる暮らしをひとつのモデルとして発信している。

表3 『マウル (村) 第3号』～タイトル, 著者, 所属の一覧

■ 『マウル (村) 第3号』テーマ「農地, 未来の農のための土地」 総ページ数 336	
扉	
「共同の土, 共同の記憶と未来のために」	パク・ヨンソン (マウル (村) 学会共同運営委員長, 編集委員長)
芽生え—農地, 未来の農のための土地	
「韓国の近現代農地制度の変遷と農業の未来」	パク・ソクドゥ (韓国農業史学会長)
「青年新規就農者と農地支援政策: 青年新規就農者は「どのように」農地を確保し利用しているのか」	イ・ヒャンミ (韓国農漁村公社農漁村研究院主任専門研究員)
「持続可能な農地の共有化と保全」	ホン・スンミョン (プルム学校元校長, 農村教育共同体運動のリーダー)
「正農会 (チョンノンフエ) の共有農地運動」	クム・チャンヨン (全国帰農運動本部と正農会の役員)
継承   農業環境保全政策と農村の現実	
「農業生態系環境プログラムの導入と今後の課題」	イ・グァンリュル (忠南研究院研究委員)
「農業環境の保全と地域社会の実践: オランダの地域協同組合の起源と特徴」	キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員)
鍛錬   多機能農業と新しい農民	
農業・農村・農民 連続座談会 2	キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員)
「多機能農業と新しい農民」	ファン・スチョル (農政研究センター所長)
	チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元プルム学校専攻部教員)
浸透	
連載—千個の記憶 3	
「クムビョン里キメ村の満州老人と村の土地」	チェ・ソンユン (洪東面の住民, 大工としてプルム学校の建設に関わる)
	イ・ビョニョン (プルム学校卒業生, プルム生協の設立, 地域新聞創刊を主導, 現在同紙の記者兼論説委員)
	ザン・ユリ (プルム学校卒業生, マウル学会事務局スタッフ)
「農夫と土地と家」	チェ・ムンチョル (障がいと農業のつながりづくりに取り組む)

「私の有機認証取り消し体験記」	チョ・デソン (プルム学校専攻科卒業生, 協同組合若い協業農場, 営農)
「隠れた資源探し行事の隠れた意図」	
「スマートファームと土地を耕す生活」	チョン・ヨンファン (プルム学校卒業生, 協同組合若い協業農場メンバー, マウル学会運営委員)
連載—協同組合若者協業農場体験報告書 1	キム・セビン (洪東バルマク図書館職員, 農業)
「プルム学校と若者協業農場」	チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元プルム学校専攻部教員)
<b>拡大</b>	
連載—本を通じて人生を読む	
「人間は責任から逃れるな:『人類世』と『違う世のための7つの代案』」	チャン・ジョンイル (詩人, 作家)
連載—働く老子 3「風流と勉強」	ハム・ソンホ (詩人, 作家)
リレー連載—韓国近現代村の空間変遷記 1	
「ヨイドー記憶と消滅」	カン・ホング (写真家, 釜山カウン写真美術館)
マウル文化を読む	
「地域創作空間の社会的意味: 忠南ホンソン郡イ・ウシノの家」	ユン・フヨン (キュレーター)
「村の生活を召喚するマウル写真家たち」	パク・ヨンソン (写真家)
<b>付録</b>	
マウル学会イルソコンド 紹介と活動記録	

### 3.4 第4号 「農民と住民って、いったい誰なんだろう」

編集責任者であるパク・ヨンソン氏は、第4号の編集方針をこう記述している。「今号では農家の人を資本主義的経営主体である農業人として呼称することをはじめ、農村で働くことに対する国家と法の枠組みが呼び起こす混乱を再照射し、農民、住民、風景、住居空間に至るまで、様々な側面から実践的再定義を試みる」。さらに本号では「法が定めた『農業人』の概念と法制外の社会的次元で通用される『農民』という概念が一致しないこと、そのために生じる問題」についての議論を投げかけている。また、日本同様、男性の農業人に比べ、地位が低く補助的な位置づけと認識される場合が少なくない女性農業人に関する諸課題について問題提起をする。さらに、農村におけるマウル(村)づくりを研究と実践の両輪で支援してきたク・ジャイン氏の論考により、住民自治、住民の自治意識に関連する問題提起をする構成となっている。

表4 『マウル(村) 第4号』～タイトル, 著者, 所属の一覧

■『マウル(村) 第4号』テーマ「農民と住民って、いったい誰なんだろう」 総ページ数 208	
<b>扉</b>	
「国家と法の呼名を越えて」	パク・ヨンソン (マウル(村) 学会共同運営委員長, 編集委員長)
<b>芽生え   農民と住民</b>	
「農業人か, 農民か」	キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員)
「農民農業, 自律と協働」	
	ジャン・ダウ・バン・デル・プルーフ Jan Douwe van der Ploeg (農村社研究者, 大学名誉教授)
「女性農業人の居場所はどこか」	キム・グイヨン (婦農婦村センター長)
「青年農民を育てる地域の実践農場」	キム・ギフン (忠南研究院研究委員)
「誰が村の主人なのか, 住民は誰なのか: 変化する農村社会, “村の住民になる資格”を再び問う」	ク・ジャイン (忠南マウルづくり支援センター)
<b>フォトエッセイ   韓国近現代村の空間変遷記 2</b>	
写真 「国道2号線村の風景」	イ・ヨンソプ (写真家)
文 「国道2号線村の風景の条件」	イ・ギョンミン (写真アーカイブ研究所)
<b>浸透   農村から</b>	
「ユン・ジェヨンさん」	ホン・スンミョン (プルム学校元校長, 農村教育共同体運動のリーダー)
「Beyond 小農」	チョ・デソン (プルム学校専攻科卒業生, 協同組合若い協業農場メンバー, 営農)
協同組合若い協業農場の実験報告書 2	
「若い協業農場と村」	チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元プルム学校専攻部教員)

働く老子 4 「風流に暮らす：裨補風水と都市再生」	ハム・ソンホ (詩人, 作家)
鍛錬   農業・農村・農民 連続座談会 3 「地域農業の組織化と村作り」	ク・ジャイン (忠南マウルづくり支援センター) キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員) チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元ブルム学校専攻部教員)
書評 本の向こうの人生を読む 「チョムスキーがいないアメリカはどれほど惨いか」 「新しい地域共同体のための村の中の家」	チャン・ジョンイル (詩人, 作家) チョン・ギファン (建築家)
著者たち マウル総目次	

### 3.5 第5号 「マウル (村) 農業を提案する」

第5号では農村における新しい農業、農村の暮らしを提案する。市場主義、都市中心主義、資本主義企業型経営論理による政府の政策によって、社会における「共同性」が破壊されているという問題意識から本号のテーマが設定されている。農村においても資本のある大規模な農家は政府の手厚い支援を受ける。一方、農地が少ないあるいは持たない農家は政府の支援という恩恵から排除され、こうした格差は益々広がっているという。課題を解決するための新たな発想と実践が必要であると述べている。編集委員会では誌面を通して、「マウル (村) 農業」という新たな構想を提案する。概念としてはまだ定まったものではないようだが、マウル (村) 農業が既存の農業の領域を越えて、農村住民の生活問題を共同で解決していく活動全体を包み込む包括的概念であり、総体的発想であるという。個々の農家単位ではなく、村の住民の合意の中で共同で生産・加工・流通・体験などを総合的につなぐ農業であり、行政単位ではなく地域社会を意味する村に住む農民と住民の合意を前提とする集会的活動の全体であると、その概念を説明している。つまり、マウル (村) 農業は農業に限定されず、文化・教育・環境・福祉問題なども共同で解いていくすべての村自治活動を包括するという発想だ。こうした視点からいわゆる行政が区分する地域単位である「里単位」や「面単位」(日本の町や村、区といった行政区分のこと)とは異なる共同農業活動の単位から住民を捉えていく可能性を検討する論考も掲載されている。

表5 『マウル (村) 第5号』～タイトル、著者、所属の一覧

■ 『マウル (村) 第5号』テーマ「マウル (村) 農業を提案する」 総ページ数 252	
扉 「農業と農村の相互持続はどうしたら可能になるか」	パク・ヨンソン (マウル (村) 学会共同運営委員長, 編集委員長)
芽生え   マウル農業を提案する 「なぜマウル農業なのか」	ク・ジャイン (忠南マウルづくり支援センター長)
「前近代農村社会のトウレを見直す」	ペ・ヨンドン (安東大学民俗学科教授)
*トウレ=農繁期に共同作業を行う組織, 集まり	
「日本の集落営農の現況と示唆点」	ユ・ジュンギョ (イソン地域支援センター長)
「農業環境保全とマウル農業」	キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員)
鍛錬   農業・農村・農民 連続座談会 4 「村と農業」	ク・ジャイン (忠南マウルづくり支援センター長) キム・ジョンソプ (韓国農経済研究院 研究委員) チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元ブルム学校専攻部教員)



フォトエッセイ 韓国近現代村の空間変遷記 3

「不安, 不一安」

チェン・ジュハ (写真家)

浸透 | 農村から

「帰農 20 年, 思い出される言葉」

キム・ジュンガク (営農)

「小農業の力はどこから来るのか」

キム・チャンヨン (マウル (村) 学会運営委員, 編集委員)

「『ユン・ジェヨンさん』, その後」 ホン・スンミョン (プルム学校元校長, 農村教育共同体運動のリーダー) 協同組合若い協業農場実験報告書 3

「協同組合と若い協業農場」

チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元プルム学校専攻部教員)

働く老子 5

「お話が作る人間と共同体の価値」

ハム・ソンホ (詩人, 作家)

本を通じて人生を読む

「夢が重荷になる年齢」

チョ・デソン (プルム学校専攻科卒業生, 協同組合若い協業農場メンバー, 営農)

「生態系を保護する方法と“生態的法秩序”」

チャン・ジョンイル (詩人, 作家)

著者たち

マウル総目次

3.6 第 6 号 「コロナ以降の社会と農村の可能性 自治と支援 / 補助, その境界の不安」

第 6 号では地球温暖化による災害や新型コロナウイルスといった全人類の危機と資本主義システムの関連を検討している。ある種の犠牲の上に成り立つ「安価な」物質的豊かさや技術的利便性を享受してきたつけを払う時が迫っていると指摘する。また, こうした状況に対して, 哲学が果たす役割があると巻頭論文執筆者であるユ・デチョル氏が述べる。「結果から話しましょう。もう『一緒に人生』を工夫しなければならない時です。長い時間, 私たちは『一人で』『私』だけを考えてきました。孤独に 1 人で生きて行くのではなく, 人と共に一緒に人生を工夫する, 知恵を絞ること, そうした知恵を愛するのが「哲学」であり, そのような知恵を愛する人が哲学者であるという。地球温暖化による災害や新型コロナウイルスの脅威の中, その不安の中でどのように一緒に生きるのかを根源的な部分から問うている。後半は, 農業や農村に使われる公共財や様々な補助事業について, 住民自治と支援の視点から問い直す論考が掲載されている。補助事業や補助金が農村に及ぼす影響や改善点について言及している。

表 6 『マウル (村) 第 6 号』～タイトル, 著者, 所属の一覧

■ 『マウル (村) 第 6 号』 テーマ 「コロナ以降の社会と農村の可能性 自治と支援 / 補助, その境界の不便」	
総ページ数 216	
扉	「今は資本主義システム転換のために連帯するとき」 パク・ヨンソン (マウル (村) 学会共同運営委員長, 編集委員長)
芽生え 1 コロナ以降の社会と農村の可能性	
「共に暮らす」工夫, コロナ以降の“哲学”の役目	ユ・デチョル (哲学労働者, オカム研究所所長)
「コロナ以降の経済? : 今もって絶えず成長せねばならぬ“GDP の論理”がはびこる」	キム・サンチョル (ナラサリム研究所研究委員, ソウル市民財政ネットワーク企画委員)
コロナ禍で希望を読みとる	
「精神医療の状況と社会的農業の価値」	アン・ピョンウン (協同組合幸福農場理事長)
「社会的距離を“狭めること”」	チョン・ギファン (建築家, 社団法人文化年研究所所長)
フォトエッセイ 韓国近現代村の空間変遷記 4	
「辺境の秋」	カン・ホング (写真家, 釜山高銀写真美術館館長)
芽生え 2 自治と支援 / 補助, その不便	
「農業・農村に使われる公共財, どのようにみるべきか」	キム・ジョンソプ (国農経済研究院 研究委員)
「補助事業 このままで大丈夫か?」	
マウル共同体の資産化を模索しながら」	イム・ギョンス (協同組合理事代表)

「補助事業が農業と農民に及ぼす影響」	パク・ギユン (帰農学校校長)
「行政補助金の意味と改善点」	ク・ジャイン (忠南マウルづくり支援センター長)
「マウル自立過程に対する報告書：協同組合若い協業農場 周辺に投入された補助金に関して」	チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元ブルム学校専攻部教員)
<b>鍛錬   農業・農村・農民 連続座談会 5</b>	
「農村マウルに補助金が入ると」	
<b>書評 本を通じて人生を読む</b>	
「定着という神話：『反穀物の人類史』を読んで」	チャン・ジョンイル (詩人, 作家)
「生き方としての“リテラシー”：『ユーチューブは本を飲み込むのか』	キム・ガンウ (韓国・大田大学教授)
著者たち	
マウル総目次	

### 3.7 第7号 「21世紀農村マウル(村)文化の再構成」

第7号では無意識的に受け入れている「文化」概念を再検討している。多角的な論考を多様な分野の執筆陣から集め問題提起をしているのが特徴だ。西ヨーロッパ圏で醸成された文化を過剰に普遍化し、「高級、エリート、純粹、高価な文化」と「低級、大衆、虚偽、安価な文化」に分けてしまっている現状を憂う。文化の新しいゾーンや形式を探す必要があると説く。編集委員長のパク・ヨンソン氏は、「21世紀にふさわしい農村文化の再構成を切望している」と述べる。文化に高低はあるのか。第7号では21世紀の農村文化を再構成するという大きなテーマのもと、共通性と自律・自作、開放・多様性、生態適正性の方向から検討している。こうした問題意識から詩人、歴史人類学者、文化人類学者、物理学者、農業人、ミュージシャン、アーティストの各氏から農村文化再構成に関わる問題提起や提案がなされている。

表7 『マウル(村) 第7号』～タイトル、著者、所属の一覧

<b>■ 『マウル(村) 第7号』テーマ「21世紀農村マウル(村)文化の再構成」 総ページ数 248</b>	
<b>扉</b>	
「共通のものと文化する生活」	パク・ヨンソン (マウル(村) 学会共同運営委員長, 編集委員長)
<b>芽生え 21世紀の農村マウル文化の再構成</b>	
「最後の革命」	ハム・ソンホ (詩人, 作家)
「21世紀の農村における伝統と民俗、郷土と場所は何か」	アン・スンテク (歴史人類学者)
「農村の多元的アイデンティティと望ましい農村らしさ」	シン・ミョンスク (文化人類学者)
「農村のための科学、農村による科学」	ユ・サンギョン (物理学者)
「全員のための農業、炭素を減らす適正技術を共に探る」	チョン・ヨンファン (営農)
「リヌックス運営体制で育てる音の家庭菜園」	クォン・ビョンジュン (ミュージシャン, メディアアーティスト)
「日々の暮らしを振り返りながら自らを省みることを 助ける新しい美術の姿を求めて」	キム・ハクリャン (アーティスト, 展示企画者)
<b>フォトエッセイ 韓国近現代村の空間変遷記 5</b>	
「世紀末の風景、江景 1998～2000」	ユ・ヒョンミン (写真家)
<b>浸透 農村から</b>	
「ntact 公演、アマチュア企画者に1000万ウォンが与えられたなら」	チョ・デソン (営農, 洪城有機農業協同組合代表)
「協同組合若い協業農場実験報告書 4」	
「若い協業農場と学習」	チョン・ミンチョル (協同組合若い協業農場理事, 元ブルム学校専攻部教員)
<b>鍛錬 農業・農村・農民 連続座談会 6</b>	
気候危機と農業	
<b>連載—マウル暮らしのための概念語辞典 1 コモンズ, コミュン, コミュニティー</b>	
「Communisの存在たち」	ユ・デチョル (哲学者)

書評 本を通じて人生を読む

「世界史のもう一方側」

ジェームス・C・スコット著『私たち全員アナーキストだ』

「農民、失われた20年とこれからの20年」

リチャード・セネット『職人—現代文明の失われた考える手』

チャン・ジョンイル（詩人、作家）

チョン・ギファン（建築家）

著者たち

マウル総目次

#### 4. おわりに

本稿では韓国農村地域における住民による地域学会「マウル（村）学会」が刊行する書籍に着目し、住民の問題意識や問題提起する内容の把握を試みた。本来であれば同地の調査を行い、出版に至るまでの住民間の議論をたどり、学習過程を明らかにする必要がある。社会教育実践の研究においては、この学習過程と住民の意識変容を問わなければならないだろう、しかし、新型コロナウイルスによる制限があり、学びの過程の調査は今後の課題とせざるを得なかった。とはいえ、今回の出版書籍の整理から、地域住民によって組織された地域学会の教育機能の一端を確認することができた。

あらためて創刊号から第7号までを振り返ると、まずこの書籍を発行する目的が単なる読み物ではなく、自らの考えを示し、住民同士の議論を呼び起こす素材であることが明確に示されていた。村での暮らしは相互扶助と自治が重要な要素であり、村で起こることは村だけのことではなく、広く世界に通じているものであること、そしてそれらを解くためには共に模索する努力と実践、そして議論が欠かせないことであると明言されていた。この書籍はそれらを発信するためのツールとして位置付けられていた。

創刊号では洪城郡洪東面に位置するプルム学校を核に積み上げられてきた農村教育共同体運動のリーダーであるホン・ソンミョン氏のインタビューを掲載していた。精神的支柱となってきたホン氏の言葉から学会の名称ともなっている「イルソゴンド精神」を確認することとなっていた。当地では農業だけ、仕事だけを行うことを戒めている。常に仕事と学ぶことをひとつのこととして暮らしを考えることが意識されており、農村教育共同体の揺るぎない理念が示されていた。第2号では教育が学校という閉じた空間、制度だけのものではないことを指摘していた。教育は学校という制度上の施設で行われるものだけでなく、村全体で行うものであることが確認されていた。第3号では農地や新規就農者に関わる諸課題を制度や歴史から考える内容となっていた。また、プルム学校で学んだ後に農業を営む若い世代の卒業生の寄稿文が複数掲載されていた。一部の住民や専門家が寄稿する出版物ではなく、実際生活の中で起こっている諸課題を多くの住民が問題提起する場として機能していることがみて取れた。第4号では同じ農業を営んでいても大規模経営に取り組む農業人と農地をわずかしかなかった農業人では分断があることや性別による差別の問題などを取り上げていた。第5号では新しい時代の新しいマウル（村）農業の形を模索していた。新しい農業は既存の組織や行政区分を乗り越える視点、概念の再検討が必要であるとの主張がみられた。第6号では地球温暖化による気候変動の問題や新型コロナウイルスの脅威に対して無力である人類にとって、本当に必要なものは何かを問いかけていた。その一つが「哲学」であった。孤独ではなく人と共に暮らす工夫、その知恵がまさに哲学であるという。また、精神医療と社会的農業を組み合わせた農業実践とコロナ禍の暮らしの描写から、人びとの生活の根源的な課題を問う論考もあった。第7号では私たちが無意識的に抱く「文化」

概念の再検討を迫る。日本においても韓国と同様に必ずしも農村文化を重要視しているとは言い難い。しかし、第6号で指摘されていた通り地球温暖化による気候変動や新型コロナウイルスの問題に直面するいま、近代都市文明とは異なる新しい文化、価値を見出すための議論や斬新な提案が必要であり、その糸口となるのが第7号の論考であった。

創刊号から第7号を通して共通していることは、住民が農村で暮らすこと、農民、農業、教育、土地、文化といった“概念”そのものを問い返す構成になっていたことだった。現状では仮説の域をでないが、地域学会をつくり書籍を出版するという営みは前後の取り組みを含め、自らの仕事、暮らし、世界とのつながりを問うような深い学び合いを生み出す社会教育実践となりうる可能性があるのではないか。

本稿では出版書籍から地域住民の問題意識や問題提起を概観した。新型コロナウイルスの影響により、現地でのインタビューをはじめとしたより精緻な調査の実施は今後となるが、本稿で整理した内容を基礎データとしながら、「マウル（村）学会」の出版書籍をはじめ洪城郡洪東面の教育実践全体がどのように展開し、住民の暮らしを豊かに創造しているのかを明らかにしていきたい。

※本研究は JSPS 科研費 JP20K02542（研究代表：吉岡亜希子）の助成を受けたものです。

## 文献

『マウル（村）』創刊号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2017年12月

『マウル（村）』第2号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2018年7月

『マウル（村）』第3号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2019年1月

『マウル（村）』第4号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2019年8月

『マウル（村）』第5号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2020年2月

『マウル（村）』第6号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2020年9月

『マウル（村）』第7号，マウル（村）学会イルソゴンド発行，2021年3月

尾花清・洪淳明『共に生きる平民を育てるプルム学校—学校共同体と地域づくりへの挑戦—』キリスト教図書出版社，2001

鈴木敏正ほか，「韓国農村教育共同体運動と代案学校・協同組合の展開」、『「地域と教育」再生研究会調査研究報告書 第1号』，北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室，2011

吉岡亜希子・河野和枝・若原幸範「韓国農村地域における教育共同体の創造—代案学校を核に深化した教育実践の10年間の変化に注目して—」『北海道文教大学論集』第22号，2021

# **Content of Learning and Dissemination of Residents in Rural Areas of Korea: Focusing on the Publications of Regional Societies Organized by Local Residents**

YOSHIOKA Akiko

**Abstract:** This study focuses on the publications of regional societies organized by residents in rural Korea. An analysis of these publications reveals what rural residents are learning and disseminating. This paper is part of a study that clarifies the role of adults and community education in sustainable rural community development. Seven books published from 2017 to 2021 were analyzed. As a result of the analysis, it was found that the content was composed of questions on the concepts of living in rural areas, farmers, agriculture, education, land and culture, and inspiring discussions among residents.

**Keywords:** Rural education community, Sustainable community development, Regional society publications, Adult and community education, Korea